優しくない世界で頑張って

御神楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
優しくない世界で頑張って

【Ｎコード】
Ｎ２５７０ＢＡ

【作者名】
御神楽

【あらすじ】
自作短編小説です。他サイトにも投稿しております。

（前書き）

この世界は優しくない。
弱い存在は淘汰される。
弱いと生きていけない。
弱者に幸福は訪れない。

だから、わたしは幸せになれない。
絶対に。

それはもう決定事項のようだ。
わたしの一生に幸せな瞬間はないようだ。
それは、すごく、嫌なことだった。

世界は優しくない。
皆、厳しい。

こんな世界に、生まれるべきではなかったんだ。

生まれる世界を間違えた。

でも、もう取り返しはつかない。

なら、せめて……。

やり直したい。

もう一度、始めから。

なにも知らなかった日々からやり直したい。

こんな過酷を知る前に戻れれば、まだ生きていけそうだ。

それもきっと、叶わないことだと知っていたけど……。

どれだけ望んでも、それは手に入らない。

わたしは、それを知っている。

だから、わたしは、世界を……。

変転

人工的な光が目に掛かる。

真上の蛍光灯がゆらゆらと揺れていた。

それがわたしが目を覚まして見た、最初の光景だった。

眩しい。

だから、起きた。

「電気つけっぱ……」

電灯を付けたまま寝てしまったらしい。

うっかりしていた。

電気代も馬鹿にならんと言うのに。

しっかりせねばなるめぇよ。

立ち上がる。

すぐ隣で父が寝ている。

大好きな父だ。

どうやら久しぶりに父と一緒に寝ていたらしい。

わたしはまだ乳離れならぬ、父離れが出来ていない。

父とはらぶらぶの仲だ。

イエーィ。

父の頬にキスをする。

ほどよくひんやりとしていて、髭が触れてチクチクした。

シャワーを浴びる。

わたしは朝シャン派なのだ。

髪を乾かして、準備をする。

学校に行く準備だ。

今は夏休み中なのだが、生徒会の仕事はある。

そう、わたしは生徒会の役員でもあった。

時間を確認。午前六時。

頃合い、かな？

頷く。

自問してから、玄関へと向かう。

母が寝ていた。

大好きな母だった。

「もう、お母さんたら！またこんなところで寝てっ！」

「……」

母は何も言わずに眠っている。

酒飲みである母は頻繁に玄関で倒れている。

仕方がない母だ。

けど、好きだ。

†††††から。

家を出る。

香奈ちゃんに連絡する。

待ち合わせて一緒に登校することにした。

待ち合わせ場所はわたしの家の前。

香奈ちゃんはそこそこの時間を掛けてきた。

わたしを見つけると子犬のように駆けてくる。

カワイイ、カワイイ、香奈ちゃん。

「おはよう♪」

「うん、おはよう♪」

朝の挨拶。

元気が良い。

気分もいい。

だから、いつもとは違う登校をしよう。

「今日は車で行こうか？」

「うん、いいよ。有紗ちゃん、運転上手だもんね！」

「えへへ、そんなことないよ。すこし練習すれば香奈ちゃんもすぐ上手くなるよぉ」

「うう、でも、機械苦手だしな……」

香奈ちゃんはしゅんとなる。

カワイイ。

抱き締めたくなった。

だから、抱き締めた。

「ぎゅ」

「うわわ」

香奈驚く！

でも、離さない。

良い匂いと柔らかい感触に酔う。

「もぅ、苦しいよぉ、有紗ちゃーん」

「ぎゅ〜〜〜ぅ」

笑いながら香奈ちゃんは言って、体を離そうとする。
なかなか力強い。さすがは香奈ちゃん。
でも、ダ～メ。
この感動は病み付きになるよぅ。
やがて、観念したのか大人しくなった。
これで香奈ちゃんはわたしの抱き枕決定である。

さて、と気を取り直して、登校することにした。

母の車を出す。

香奈ちゃんを助手席に乗せて、わたし達は走り出した。

さすがは車。早い早い。

「そういえばさぁ…、香奈ちゃんのお姉さんって子供生んだんでしょ？」

「うんうん！ヤバいほどカワイイんだぁ～。今度、抱っこしにきなよ」

「勿論、いくいく！うわぁ、いいな～赤ちゃん！羨ましいなぁ！」

「えへへ～」

香奈ちゃんは照れたように笑う。

「でもぉ、有紗ちゃんの家族だって素敵じゃん。優しいお母さんに、格好良いお父さん。理想的な家族だよぉ～」

「えへへ、そうかなぁ」

わたしも笑う。

今日は楽しく登校した。

いつものように上履きを履いて、生徒会室に入る。

予定よりも時間が掛かってしまっていた。

でも、いいや。

彼の気配はあった。

朝早くから、彼はいる。

「おはようございますっ！」

わたしは陽気に挨拶をした。

わたしを見て、彼はすぐさま近づいてくる。

彼はわたしにぞっこんラブなのだ。

そして、わたしもぞっこんラブ。

つまり両想い。

きゃっん、恥ずかしい♪

「有紗っ、会いたかったよ！」

「うん、わたしもよ！」

がばっと抱き付く。

彼はそれを受け止める。

そのまま押し倒すように椅子に座らせた。

「ねぇ…、久米くん」

「ン…、なんだい？」

彼、久米くんの胸の中で呟く。

久米くんの心臓はさっきからドクドクしている。

緊張してる。

カワイイ。

「スキ」

その言葉を口にする。

もう何度目だろうか。

忘れてしまった。

「……」

久米くんは黙り込む。

心臓が爆発したように大きく鼓動を上げる。

照れてる。

カワイイ。

「もぅ…」

わたしは満更でもない気持ちで、顔を上げる。

そして、久米くんの顔を両手で包みこむ。

久米くんは赤くなっていた。

きっとわたしも恥ずかしいほどに真っ赤だったと思う。
でも、勇気を出して、久米くんにキスをした。

口と口。
濃厚なキスだった。
愛しくて、何度も何度もした。
頭がとろけてしまいそうだった。
やがて、チャイムが鳴った。
そろそろ他の役員達が来る時間だ。
やばっ。
わたし達は離れて、距離をとる。
わたし達の愛は他の人には秘密なのだ。
わたしはこの学校のアイドル的存在で、久米くんもそうだ。
だから、お似合いと言えばその通りなんだけど、やっぱり皆の夢は壊したくない。

偶像は偶像としての責任が必要だ。
決して、無責任であってはならない。
夢は叶えるものでなく、視るものなのだから……。

廊下に出る。
先生と目が合った。
中村先生。
男前な人気のある先生だった。
わたしを見つけると駆け足で寄ってくる。
そして、いきなり手を取られた。
「先生っ、イタイ」
「黙ってついてこい」
わたしを引っ張って階段の踊り場まで移動した。
そこでわたしは手を振り払う。

中村先生はゆらりと態勢を崩すと壁に体重を預ける。
ゆっくりと腰を下ろして、床に座った。
上目遣いでわたしを見つめている。
「おい…、生徒会室でなにをしていた？」
ぶっきら棒に言う。
久米くんとのことを見られていた。
心苦しくなる。
「俺の…、気持ちを知っていて、なぜ…？」
そう、中村先生はわたしに恋をしている。
いや、愛してくれている。
それをわたしは知りながら、久米くんへの想いを断ち切ることができなかったんだ。
ごめんなさい。
謝ることしかできない。
「先生…、やっぱりわたし、久米くんのことが……」

「あんな奴よりっ！俺を見ろっ！」

唐突に中村先生が声を荒げる。

力強い言葉に、ときめいてしまう。

その時、わたしは久米くんのことを一瞬忘れてしまった。

ゆっくり一歩を踏み出す。

先生に近づく。

「……そうだ！俺はお前を愛してる！俺の所に来い！」

その言葉を聞くと、もう止まれなかった。

もう一歩進んで、先生の胸に飛び込んだ。

大人の男性の体温に包まれる。

暖かい。父のような冷たさはない。

ほんのりと温かいものが流れ込んできた。

先生は笑っている。

わたしも不思議と笑顔になった。

学校を出て、帰路に着く。

酷く疲れていた。

今すぐに寝てしまいたい衝動に駆られる。

でも、我慢した。

とぼとぼと歩く。

なぜだか家には帰りたくなかった。

まだ帰りたくない。

熱い。

夏の日差しが熱い。

頭が沸騰しそうだった。

その沸騰してしまった頭で思い出す。

朝の会話。

香奈ちゃんとの会話だ。

「そうだ…、赤ちゃん抱っこしに行こう！」

目的が出来るとなんか元気が出てきた。
早速わたしは香奈ちゃん家に向かった。

時間が掛かったが無事到着する。

もう辺りは暗くなっていた。

家の明りが付いている所を見ると、もう家族が揃っているようだった。

玄関のドアを捻る。

「ありゃ？」

開かない。鍵が掛かっていた。

一度下がって、家の全体を見る。

二階の一室に開いてる窓があった。

「ふぅ～む」

ストレッチをする。

仕方がないからあそこからお邪魔することにした。

庭の木に登り、屋根に乗る。

屋根を伝って、その部屋へと入った。

室内は暗い。

事前にわかっていたけれど。

香奈ちゃんの部屋じゃない。

恐らくお姉さんの部屋だと思う。

綺麗に片付いている。

女性の部屋の鏡のような部屋だ。

その中に似合わない存在が一つ。

人形だ。

檻の中に人形が横たわっていた。

不細工な人形だった。

まるで洗練さがなく、不気味でさえある。

似合わない。

この部屋にこれは似合わない。
老婆心ながら、これはわたしが棄ててしまおう。
その方がお姉さんの為だ。
ひいては香奈ちゃんの為にもなる。
わたしは人形のきている服の襟首を掴んで持ち上げる。
ソレを片手に持ったまま、部屋を出た。

廊下も暗い。
階段を降りようとして、手すりに掴まろうとしたら、何かが手に触れた。
何かは階段の下に落ちてしまった。
がしゃーん、と割れた音が聞こえる。
花瓶を落したらしい。
不注意だった。後で謝らないといけない。
素敵な人間は自分の非をきちんと認められるのだ。
「う～ん、わたしって大人ぁ」

自画自賛。

それでわたしは満たされた。

とりあえず階段を降りようと思った、その時。

花瓶の音を聞いて、香奈ちゃんの家族がリビングから出てきた。

当然、わたしは見つかってしまう。

「えへへ、お邪魔してます」

手に持った人形を振りながら、わたしは挨拶した。

すごく驚かれる。

居たのがわたしだとわかって皆の顔色が変わった。

「もー、有紗ちゃん！そんな驚かすようなことしちゃダメじゃない！！」

困ったように、お姉さんが怒鳴り声を上げる。

気まずくて、頭を掻く。

「いや、でも、ほら！鍵掛かってたから仕方なくですよぉ」
「インターフォン鳴らせばいいでしょ！？」
「そんな怒らないでくださいよ。出来心だったんですよぉ」
お姉さんは声が大きくて困る。
びっくりしちゃうじゃない。
不意に香奈ちゃんのお母さんがいなくなっていた。
遠くでサイレンの音が聞こえてくる。
事故かな？
事故は怖いね。
おぉ、怖い怖い。
下の皆がうるさくなっていた。
これは一つ謝らないとダメかもしれない。
不本意だけど、仕方ない。
愛と誠意を以て、行おう。
階段を降りようと足を出して、足場を失う。

視界がぐちゃりと歪みを見せる。

瞬間、上下の感覚が消滅した。

意味不明。

理解不能。

曖昧模糊。

判然としないまま、わたしは倒れた。

倒れて、階段を転げ落ちる。

一切の受け身も、抗いもせずに、身体の力を全力で抜いて、わたしは落ちる。

落ちて、落ちて、回って、回って、ぶつけて、ぶつけて、痛めて、痛めて、笑って、笑って、傷つけて、傷つけて、

喜んで、喜んで、転がって、転がって、守って、守って、抱き締めて、抱き締めて、思い出して、思い出して、変転した。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

反転

意識を失っていたのは一瞬だった。

でも、動けない。

体は動かなかった。

全身が痛い。いろんな所から血が出ている気がする。

視界はチカチカしていて、自分の状況もよくわからない。

色々思い出せた気がしたけど、それも忘れてしまっていた。

しかし、せっかくの無限とも言える刹那だ。

これまでの自分を思い直して、思い出すことにしよう。

……。
……。
……。
……。
……。
……。

両親が喧嘩していた。
既にわたしには見慣れた光景だった。
毎日のように両親は喧嘩していた。
いつも、と言えば、いつもの光景だった。
その日違ったのはわたしだ。
その日、辛い事があった。
泣いてしまうほど嫌なことがあった。

毎日イジメを受けてきたけど、それでも泣く事はなかったのに、その日は泣いてしまった。

失恋をした。

知りもしない女の子に、好きな人を取られてしまった。

仕方がないことではあった。

そうなるとわかっていることでもあった。

告白する気はなかったし、ただ憧れるだけの人だった。

けれど、辛かった。

教科書に落書きされるよりも。

机に中傷する言葉を書かれるよりも。

水を掛けられるよりも。

上履きが切り裂かれるよりも。

お金を取られるよりも。

罵倒されるよりも。

殴られるよりも。
無視されるよりも。
なによりも、辛かった。
耐えられなかった。
涙があふれた。

家でずっと泣いていた。
いくら泣いても、すっきりしなかった。
溢れて、溢れて、止まらなかった。
失恋を皮切りに、今まで我慢してきた辛さが押し寄せてきた。
辛くて、いくら泣いても楽になる事はなかった。
そして、両親が喧嘩を始めた。
いつものように母の散財のことで喧嘩をしていた。
母は酒好きで、男好きだった。
お金は掛かる。しかし、稼ぐ事はしない。

家事もしない。全部わたしに押し付けた。
わたしは母が大嫌いだった。
たぶん、父も離婚を考えていたと思う。
けれど、父は優しい人だった。
離婚した後の母のことを心配してもいた。
だから、離婚に踏み切れなかった。
父は甘い。とろけるように甘い。
そんな父のことがわたしは好きだった。大好きだった。
だから、その日、わたしは思ったんだ。
父の代わりになろう、と。
父の代わりに勇気を出そう、と。
勇気。
そう、勇気を出せば、こんな辛くなることもなかった。
好きな人に告白していれば、少なくとも後悔はなかった。
もしかしたら、幸せな結果があったかもしれない。

今ではそれは遅いけど、父はまだ間に合う。
父にわたしのような辛さを味わってほしくなかった。
だから、父を解放させてあげようと思った。
そして、父から感謝されることで、この辛さを払拭しようと考えた。

自分の部屋を出て、包丁を手にした。
言い争う二人を見つけ、そして母を包丁で刺した。
その行動に疑問はなかった。
でも、うまくはいかなかった。
背中に刺さって、一突きじゃ殺せなかった。
母は逃げ、わたしは父に抑えられた。
もがいた。
これでは父が辛い目に合う。

それは嫌なことだった。

必死に暴れた。

そうしたら、父が死んでしまった。

包丁が首に刺さっていた。

初めて、返り血を浴びた。

途端に吐き気と罪悪感に襲われた。

けれど、それらを全て呑み込んで、わたしは母を追った。

でないと無駄になると思った。

玄関で追い付いて、母を刺した。

背中と足と腕と腹と胸と首と顔と頭。

全部刺した。

母は死んでいた。

断末魔は酷いものだった。

父は声もなく死んだというのに、この女は……。

感情的になって、蹴った。

踏み付けた。母のお気に入りのヒールで眼を刺した。口に傘を刺し込んだ。四肢を切って、鉢植えに植えた。

奇怪なオブジェ達が出来上がった。

感無量だった。

すっきりしていた。

これで父は辛い目に合わない。

わたしは父の為に母を殺した。

父も死んでしまったけど、きっと喜んでいるはずだ。

父の傍に寄る。

「やったよ、お父さん。お母さん死んだよ」

「……」

父は何も言わない。

「そんなぁ、褒めないでよ。当たり前じゃん、家族なんだからさ」

この時に、わたしはどうにかなってしまったんだろう。

「えっ！？いいよ、もうこんな歳だし……」

わたしの何かがズレてしまった。

「もぅ…、仕方ないなぁお父さんは。今日だけだからねっ！」

人間として大切な部位が壊れてしまった。

「えへへ、お父さんあったかぁい……」

変転してしまったんだ。

――D．C．

わたしは眠らなかった。

ずっと父の死に顔を見て続けた。

やがて、朝がきて、起きる。

「電気つけっぱ……」

呟いて、立ち上がる。

そして、父にキスをする。

冷たい。髭が気にならないほどに冷たくなっていた。

父は死んだ。

知っていることを再認識する。

父は永遠になった。

それは素晴らしいことだった。

わたしの思い出の中でずっと生き続けるのだ。

魅力的な事実だった。

温かさは欲しかったけれど、でも、妥協しよう。

母は、いらない。

わたしの思い出に母はいらない。

消した。

もう思い出す事もないだろう。

シャワーを浴びる。

全身の赤を洗い落した。

新しい制服に着替える。

学校に行こうと思う。

出来れば、永遠になった父の残骸は見ていたくない。

頷く。

玄関に向かった。

奇怪なオブジェがあった。

「もう、お母さんたら！またこんな所で寝てっ！」

「……」

オブジェは何も言わない。

当然だった。

死んでるから。

家を出て、思い付いた。

香奈ちゃんと一緒に登校しよう。

香奈ちゃんは唯一仲の良い友達だ。

彼女だけはわたしを一度もイジメないし、むしろ助けてくれたこともある。

大切な友達だ。

友達だったら、一緒に登校するのが当たり前だ。

電話して、呼びだした。

暫くして、彼女は来た。

息を切らせて、髪型もいつもより崩れている。

きっと急いで準備してくれたことは一目でわかった。

本当に、この子は優しい。

彼女がいたおかげで、わたしは少なくとも不幸ではなかった。

失いたくない。

「はぁ…はぁ…、なんでこんな早い時間に学校いくの？」

「うん、おはよう！」

父と同じくらい失くしたくない。

「今日は車で行こうか？」

「え…っ、何言ってるの？あたし達、まだ中学生じゃん」

「えへへ、そんなことないよ。すこし練習すれば香奈ちゃんもすぐ上手になるよぉ」

「ちょ、ちょっと有紗ちゃん…、しっかりしてっ！？」

香奈ちゃんを永遠にしよう。

いつまでもわたしの世界で生きてくれるように……。

抱き付く。

首を抱き締める。

包丁は使わない。

香奈ちゃんは優しい。

だから、優しく永遠にしよう。

「ぎゅ」

「っが、ぐ、ぎ」

もがく、もがく。

可哀想なほど顔は真っ赤だ。

汗ばんだ匂いと頬を撫でる綺麗な髪の感触に酔う。

「あっが、ぁうっ、あ、りっさ、ちゃ、っ」

「ぎゅ〜〜〜ぅ」

泡を噴き始めた香奈ちゃんは、最後の抵抗をする。

必死に腕を振り回し、殴る。

体のいろんなところに当たって痛かった。

やがて、力尽きて大人しくなった。

これで香奈ちゃんは永遠になった。

車を出す。

永遠になった香奈ちゃんを助手席に乗せる。
助手席は瞬く間に香奈ちゃんの排泄物で汚くなった。
でも、わたしは気にしない。
これは香奈ちゃんの残骸だ。
香奈ちゃんはわたしの中で生きている。
今でも優しく微笑んでいる。
車を走らせる。
加減がわからず、すごくスピードが出た。
「そういえばさぁ…、香奈ちゃんのお姉さんって子供生んだんでしょ？」
「……」
「勿論、いくいく！うわぁ、いいな～赤ちゃん！羨ましいなぁ！」
「……」
道路に出て、すぐ電柱にぶつかった。
エアバッグがわたしの顔を破壊する。
でも、生きていた。

鼻の骨が折れた気がするけど、気にしない。

頭も打って流血しているけど、気にしない。

いずれはわたしの残骸になる体だ。気に病む必要はなかった。

横を見る。

香奈ちゃんの残骸は潰れていた。

電柱にぶつかったのが助手席側だった為、彼女の残骸は衝撃で押し潰されていた。

でも、気にしない。

所詮、香奈ちゃんだったものだ。

「――――――――――――」

「えへへ、そうかなぁ」

わたしは沈黙すら失った彼女の残骸を笑った。

楽しい登校だった。

いつものように上履きを履かずに、空き教室に入る。

事故を起こした為、時間が掛かってしまった。

幸い、朝の早い時間だったから人目はなく、無事に離れることができた。

鼻は折れたままだったけれど。

わたしは愛しの人を見つける。

生徒会長。わたしの想い人。

彼がこの時間に、この場所にいるのは知っている。

ここは彼と彼の彼女の待ち合わせ場所だ。

わたしは知っている。

彼のことはなんでも知っている。

彼の彼女はこない。

もう対処した。わたしの世界から消した。

待ち人はこない。二度と彼が目にする事もない。

「おはようございます！」

父も香奈ちゃんも、わたしの世界になった。

でも、足りない。まだ思い出が足りない。

家族、友達、次は…恋人がいい。

わたしの世界。

わたしだけの恋人。

だったら、彼がいい。

わたしは彼を永遠にする。

鼻が折れて血が滴るわたしを見て、優しい彼はすぐさま近づいて心配してくれる。

優しい優しい、わたしの王子様。

「キミっ、大丈夫か！？」

「うん、わたしもよ！」

ザシュっと喉を切り裂いた。

彼は突然の事に一歩後退する。

そのまま倒れるように椅子に腰を落とした。

わたしは彼に抱き付く。
そして包丁を突き刺した。
夢にまで見ていた彼の胸の中だった。
「ねぇ…、久米くん」
「ぁ、がぼっ、ごほぁ…」
喉と口から血を吐き出す。
血を送り出すポンプは最後の足掻きのように激しく動作していた。
血液がわたしに降り注ぐ。
心地のいいものだった。
「スキ」
永遠の愛を告げた。
わたしはあなたを裏切りません。一生、愛し続けます。
だから、一生をください。
「……」
久米くんは何度か大きく痙攣して、ようやく停止した。

濁った瞳がわたしを映している。

「もぅ」

久米くんの顔を手のひらに収める。

彼の身体は自身の血液で赤くなっている。

わたしも久米くんの返り血で真っ赤だった。

お揃い。

ペアルックだ。

嬉しい。

嬉しいので、キスをした。

口内の彼の血を貪るようにキスをした。

鉄を舐めているようだったけど、止まらなかった。

結局、彼の気道に詰まった血液を飲み干すまで止まらなかった。

でも、久米くんの血液が自分の体内にあることがうれしい。

わたし達は一つになれたのだ。

性交などしなくても、これで愛の証明は生まれる。

わたしの世界に。

わたしの中に。

彼との子が。

ゾクゾクした。

これでわたしの世界は幸せなものとなる。

家族、友達、恋人、そして子供。

極小にして、最高の世界だ。

幸せの縮図だ。

わたしは満足して、久米くんの残骸に背を向けた。

廊下に出ると先生が目の端に映った。

中村先生。

そういえば、中村先生だけは一度わたしを助けてくれたことがあった。

イジメッ子を叱って、わたしを慰めてくれた。

頼もしい先生だった。

もし兄がいたなら、こういう人がいい。

……。

……そうだ、兄にすればいい。

素晴らしい。

家族が父一人というのも寂しい。

兄が居てもいいじゃないか。

わたしの世界だ。

わたしの想いのままでいいはずだ。

先生と目が合う。

わたしを見て、先生は言葉を失った。

そんな先生にわたしは近づく。
咄嗟に先生は逃げだした。
危険に敏感な人だった。
「先生っ、イタイ」
「う、うぁ、うあああぁぁぁっ！！」
わたしは追い掛けて階段の踊り場に移動した。
そこでわたしは先生のアキレス腱を切断した。
中村先生はガクッと態勢を崩して、壁に激突し、床に転がった。
怯える瞳でわたしを見つめている。
「お、落ち着けっ、吉川…。な？」
震える様に言う。
わたしの名前を覚えてくれていた。
胸が苦しくなる。
「くそっ、動け、動け、動け、動け、動けよっ、俺の脚だろ！」
先生は自分の脚を叩く。

でも、動く事はなかった。
アキレス腱。地味だけど人体の急所の一つなのだった。
もがく先生の姿は滑稽で、思わず笑ってしまう。
「先生…、やっぱりわたし、久米くんのことが……」
「やめろっ！！来るなぁ！！」
当然のように中村先生は声を荒げる。
キーンと耳に響いた。
不快な音だった。
耳障りだった。
ゆらりと一歩を踏み出す。
先生に近づく。
「……ぁぁ、誰かっ！！誰か来てくれっ！！俺を助けてくれっ！！」
その叫びは許容できなかった。
すぐに懐に飛び込んで、馬乗りになる。
そして――

刺す。

刺す。

刺す。

その間、先生は笑っていた。

暫くして先生はわたしの兄になった。

わたしは嬉しくて笑顔になった。

それからすぐ、中村先生の声を聞いてやってきた教師や生徒達を全員駆除した。

しかし皆、わたしの世界に必要のない人間だ。

わたしの思い出に残る事はない。

不都合だったから永遠にした。

それだけだった。

学校を出る。

帰るつもりはない。

そもそも帰れそうにない。

駆除する時、抵抗され、怪我をしていた。

左小指が折れ、右手の爪がほとんど剥がれた。

なにより頭が痛い。

朝の事故の時からだが、さっきので余計に痛い。

視界が朧気で、気分が悪い。

熱が出ているようにも思える。

気を紛らわす為に、思い出す。

朝に言った自分の言葉。

「そうだ…、赤ちゃん抱っこしに行こう！」

目的を定める。

久米くんとの子供って言っても、どんな赤ちゃんか想像がつかない。
なら、モデルが必要だ。
原型がないと、思い出にならない。
わたしの世界で生きていられない。
この際、どんな赤ちゃんでもいい。
容姿は気にしない。
探そう。
そして、永遠にしよう。
早速わたしは赤ちゃんを探しに向かった。
探すのは時間が掛かったが、見つけた。
とある一軒家。
二階の窓にベビーベッドが見えた。
玄関のドアを捻る。
「ありゃ？」
案の定鍵が掛かっていた。

一度下がって、確認。

「ふぅ〜む」

すでに算段は整っていた。

庭の木を伝って、二階の窓から侵入した。

薄闇の室内。

目は既に暗さに慣れて、よく見える様になっている。

見渡す。

綺麗に整頓された室内だった。

その中で見つける。

赤ん坊だ。

ベビーベッドの中に横たわっていた。

可愛い赤ちゃんだった。

まるで天使のようで、神々しくさえある。

この子はわたしの子だ。
この世界にこの子は居るべきではない。
この子はわたしの世界にゆくべきだ。
老婆心ながら、この子はわたしが永遠にしよう。
その方がこの子の為だ。
ひいてはわたしの為にもなる。
わたしは慈しむように抱いて、持ち上げる。
赤ちゃんを片手で抱いたまま、部屋を出た。

廊下は暗い。
階段の下を見る。
底が見えない。
手すりにあった花瓶を落とす。
僅かな間を挟んで、床に落ちた。
それから導くに、約四メートルの高さ。
頭から落とせば、頭の柔らかい赤ん坊には一溜まりもない高度だっ

た。

これなら自分の手を汚す心労もない。

「う～ん、わたしって大人ぁ」

自己抑制。

さすがに無垢な赤ん坊を赤くするのは許容できなかった。

とりあえず実行しようと思った、その時。

花瓶の音を聞いたのか、その家の家族がぞろぞろとリビングから出てきた。

勿論、わたしは見つかってしまう。

これで赤ん坊を落とせなくなった。

「えへへ、お邪魔してます」

手に抱いた赤ん坊を見せ付けて、わたしは挨拶した。

母親らしい女性が絶叫を上げる。

わたしの容姿を見て、全員の顔色が変わった。

「いやぁ、私の赤ちゃんがっ！！返してっ！お願いっ！！」

恐怖を浮かべて、女性は泣き叫ぶ。

気持ち良くて、ゾクゾクする。

奪う快楽をわたしは理解し始めていた。

「いや、でも、ほら！鍵掛かってたから仕方なくですよぉ」

「返してっ！！お金でも、なんでも渡します！！人質なら私が代わりますから！！」

「そんな怒らないでくださいよ。出来心だったんですよぉ」

女性の声は官能の吐息だった。

感じてしまうじゃないか。

そこで一人、いなくなっているのに気付く。

遠くでサイレンが聞こえる。

警察を呼んだのだろう。

馬鹿？

馬鹿は嫌ね。

わたしの世界は警察なんかに犯されない。

いや、何人にも犯されることはないんだ。

さて、そろそろわたしも永遠になろう。

愛と天使を抱いて、わたしの世界へと旅立とう。

もう、この世界で生きるにはボロボロだ。

心も、身体も、なにもかも……。

だから、いこう。

わたしは階段に足を出して、そのまま姿勢を崩した。

単純明快。

単刀直入。

快刀乱麻。

すっきりした面持ちで、わたしは倒れた。

一切の受け身も、抗いもせずに、身体の力を全力で抜いて、わたしは落ちる。

落ちて、落ちて、回って、回って、ぶつけて、ぶつけて、痛めて、痛めて、泣いて、泣いて、傷付いて、傷付いて、

悲しんで、悲しんで、転がって、転がって、護って、護って、抱えて、抱えて、……赤ん坊を庇って落ちていた。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

暗転

チカチカした視界が治る頃、わたしは思い出した。

顛末を思い出した。

まるで嘘みたいな記憶だった。

そう思えるってことは、わたしのズレは戻ったのだろうか。

壊れた部位は治ったのだろうか。

わからない。
そもそも、この記憶は事実なのか。
わたしは、本当にこんなことをしたのだろうか。

戻った視界で、周囲を見る。
見覚えのない人達がいる。
距離を離して、わたしを見てる。
加えて、わたしは真っ赤だった。
思い出した記憶と合致していた。
どうやら……、本当らしい。
自然と受け止められた。
受け止めざるを得なかった。
最後は狂えないなんて皮肉なものだ。
でも、そんな皮肉さえ自然に受け止めれた。

赤ちゃんの泣き声が聞こえる。

体はまったく動かない。

だから、泣き声の方すら見れない。

けれど、わたしの折れた子指を握っている小さな手があった。

麻痺した痛覚でも、辛うじて判断ができた。

力を込めて、握っている。

よかった。

赤ちゃん、生きてた。

安堵する。

元々自分のせいだとわかっていても、やはりホッとした。

この子はダメだ。

わたしとなんの関係もない。

そんな子を、こんな狂った女の我儘に付き合わせてはいけない。

そうならなくてよかったと、わたしは泣いた。

嬉しくて泣いた。

そして、巻き込んでしまった人達を想った。

何も想えなかった。

ただ、意味のない謝罪の言葉しか浮かんでこない。

両親だけで、止まっていればよかったんだ。

香奈ちゃんも。

久米くんも。

中村先生も。

皆も。

巻き込む必要はなかったんだ。

わたしは、失敗した。

人生に、生き方に、感情の制御にすら。

弱かった。

どうしようもなく、弱かった。

自分を殺す事すらできないほど、弱かった。

けど、今ならわかる。
わたしは弱者ではない。
弱者ですらない。
弱者であったなら、もっとうまく上手に生きていけたはずなんだ。
強者であったなら、そもそも悩みなどしないはずなんだ。
だったら、わたしは失敗者だ。
状況の打開に失敗した愚か者なんだ。

その失敗の結果が、これだ。
もうリトライも、リプレイもない。
ゲームオーバーだ。
いや、これがわたしのエンディングなのか。
悔しい。

もっと上手く出来たかもしれない。

次があるなら、わたしはもっと上手く……。

でも、それは叶わない。

人生は一度だ。

代わりはない。

すごく欲しいけど、泣きたいほどに憧れるけど、もう一度はないんだ。

世界は優しくない。

皆、厳しい。

そして皆も、同じ世界で頑張ってる。

厳しい世界で、優しくない皆は生きてるんだ。

それを逃げようとしたわたしは失敗者以外の何者でもない。

不意に小指を握る手が強くなる。

この子もこの世界で生きている。
今も必死に生きている。
これから襲い来る過酷も知らずに……。

同情をしてしまう。
こんな世界でキミは生きるんだよ。
優しくない、厳しい世界で……。

けれど、それを超える羨ましさもあった。
これから、がある。
未来があって、可能性がある。
わたしにはもうないものが、この子にはあるんだ。
それがどれだけ素晴らしいか、それがどれほど尊いか。
今のわたしは理解できていると思う。

羨ましい。本当に羨ましい。
でも……、諦めよう。

それに、疲れた。

視界が白くなってきた。

もう時間はない。

わかってる。

わかってるけど、ただ一言。

先を生きた人間として、後を生きるこの子に言いたい。

辛く、厳しい、優しくもない世界で失敗したわたしの見苦しい負け惜しみのような言葉だ。

でも、聞いてほしい。

だから、聞いてほしい。

心の底から求めて、夢の果てに焦がれて、それでも絶対に得られなかったものを持っているキミだからこそ。

そして、それをもう諦めてしまったわたしだからこそ。

わたしは言う。

微かに残った万感の想いを込めて……。

「優しくない世界で頑張って」

そうして……、わたしは永遠になった。

―THE　END―

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2570ba/

優しくない世界で頑張って

2012年1月6日16時52分発行